

福音館日曜日文庫

古典を訳す

木下順二 著
梶山俊夫 画

福音館書店

著者紹介

木下順二（きのした・じゅんじ） 劇作家。一九一四年、東京に生まれる。東京大学英文科卒業。主な著作として、『夕鶴』『おんによる盛衰記』『山脈（やまなみ）』『蛙昇天』『風浪』『沖繩』『オットーと呼ばれる日本人』『冬の時代』『子午線の祀り』等（以上、戯曲）、『無限軌道』（小説）、『演劇の伝統と民話』『ドラマの世界』『ドラマとの対話』『シェイクスピアの世界』『忘却について』『運命のこちら側』等（以上、評論）。他に、『かにむかし』『わらしべ長者』『夢見小僧』『ジャックと豆のつる』（翻訳）等の著書がある。△作▽

梶山俊夫（かじやま・としお） 画家。一九三五年、東京に生まれる。一九六二年、シエル美術館賞受賞。現在、千葉県在住。絵本に、『いちにちにへんとおるバス』（ひかりのくに）、『いまなにしている』（童心社）、『いぐいぐいぐいぐ』（フレーベル館）、『ころはちだいみょうじん』『かぜのおまつり』『きりなしばなし』『さんまのおふだ』（以上、福音館書店）等、多数ある。△画▽



福音館日曜文庫

古典を訳す

一九七八年五月三十一日初版発行
一九八〇年四月三十日第三刷

著者 木下順二

発行 福音館書店

東京都千代田区三崎町一丁目
一番九号 郵便番号一〇一
電話（〇三）二九二三四〇一（代）
振替口座 東京五一二七六四五

本文印刷 明和印刷
表紙印刷 共同印刷
製本 積信堂

ND C314 / 四〇四ページ / 一九センチ
乱丁落丁はお取替えいたしません。
©1978 Junji Kinoshita

目
次



はじめに

一、『今昔物語』
こんじやく

二、『竹取物語』

三、『世間胸算用』

四、『風土記』

五、『雨月物語』

六、『古事記』

七、ほんやく翻訳という仕事をめぐって



115 93 71 53 35 17 7 3

八、『日蓮消息』
にちれんしょうそこ

九、『徒然草』

十、『本朝文粹』
ほんちようもんずい

十一、『立正安国論』

十二、『藤戸』
ふじと

十三、『三酔人経綸問答』
さんすいじんけいりんもんどう

付、
つきたり

『平家物語』による群読――

『知盛』
とももり

古典原文



古典を訳す



はじめに

日本の古典を手当りしだいに忠実に訳してみようと思う。

訳すというのは、ふつうの読書力を持った現代の日本人が、むずかしさをそれほど感じないで読める程度の日本語になおしてみようということだが、なぜそういうことを思ったかという
と、おもしろそうだからやってみようということが最初にある。それから、その仕事を通して
(古典の原文に即して) 自分の日本語を鍛えてみたいということがある。鍛えるというのは、古
典の読解力を、ということでもあり、日本語を書く力を、ということでもある。

やって行くうちにいろいろ問題が出てくるだろうと思われるが、それはその時ということにし
て、さしあたっては一つだけ、自分に課題を課して出発する。それはこういうことだ。

たとえば『平家物語』巻第四「橋合戦」に、一人の強そうな僧兵が、乱戦の中で名乗りをあげ

るところがある。その原文を、文字遣いと仮名遣いだけを今日ふうになおして写してみると、こ
うである。

大音声だいおんじやうをあげて名乗りけるは、「日ごろは音にも聞きつらん、今は眼にも見給え。三井寺みいでらには
その隠かくれなし。堂衆どうじゆの中に筒井つういの浄妙明秀じやうみやうめいしゆという一人当千の兵ぞや。われと思わん人々は寄
り合えや、見参げんざんせん」とて、二十四差さいたる矢を、差し詰め引き詰め、散々さんざんに射る。

私はこの文章は、一、二の単語を除けば、ふつうの読書力を持った現代の日本人がそれほどむ
ずかしさを感じないで読める文章だと思う。だから訳さなくてもいいわけのものだが、かりに
『平家物語』の全文を訳すという仕事にとりかかるとすると、ここだけをこのままにしておくわ
けに行かない。だがその場合、もしこれを次のように、ただやさしいだけの現代語に置き換えて
しまったとしたら、それは私がいう「訳」のうちにははいらないのである。

大声をあげて名前を告げているには、「ふだんは評判でも聞いていたろう、今は眼でよく見
なさい。三井寺みいでらでは私を知らぬ者はない。寺僧じそうの中の、筒井つういの浄妙明秀じやうみやうめいしゆという、一人で千人

をも相手にするという強い男だぞ。われこそと思うような人々は集まってこい、対面しよう」といつて……

ここでかんじんなのは、「日ごろは音にも聞きつらん、今は眼にも見給え！」という朗々として壮絶な言葉の響き、調子、力なのである。単語や言いまわしがすこしぐらいわからないということなどより、その響き、調子、力をびいんびいんと感じとることのほうが、ずっとこの文章を『理解』するうえでは大切なことなのだ。だからもし、『平家物語』の全文を私が訳していてこのくだりにさしかかったら、私はたぶん、せめて次のようにでも訳すだろう。

大音声だいおんじやうをあげて名乗ったには、「日ごろわが名は聞きおったか、今こそその眼でよく見ろ。三井寺みいでらでわが名を知らぬ者ない荒法師あらほうし、筒井つついの淨妙明秀じやうめいしやうという、一人当千いちにんとうせんの猛者つわものなるぞ。われと思わんやつばらは掛かかってこいや、相手になろう」と、背中のえびらに二十四本差した矢を、息も継つがせず次から次へさんざんに射る。

ほんとうは、「日ごろは音にも聞きつらん、今は眼にも見給え」だとか、「われと思わん人々は

寄り合えや、見参せん^{げんさん}”などいう言葉は訳したりしないほうがいいのかもしれない。原文のままにしておいて、前後の訳した部分を、それと調和のとれるようなふうに訳すのが、いちばんいい訳しかたなのかもしれないのである。

とにかくまあ、そういうところを目安^{めやす}に、私は日本のいろいろな古典をこれから手当りしだいに訳してみようと思う。そのことがどういう意味を持ってくるかという問題は、今もいったように、先へ行ってから考えてみればいいということにしよう。

一、『こんじやく今昔物語』



まず『今昔物語』の中の武士に関する一つの話を訳してみようと思う。この話は、『今昔』の

中で私がおもしろいと思うたさんの話の一つにすぎないが、この話を取りあげること、はじめに「の『平家物語』と話題がつながることになった。というの、は、『平家物語』においては戦闘者としての武士および武士団の華々しい活躍が、その頂点の姿においてまことに華やかに描かれてゐる。たとえば、

木曾左馬の頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に、唐綾おどしの鎧着て、鉾形打ったる兜の緒締め、嚴物作りの大太刀佩き、石打の矢の、その日の戦に射て少々残ったるを、頭高に負いなし、重簾の弓持つて、聞ゆる木曾の鬼薙毛という馬の、極めて太う逞しいに、黄覆輪の鞍置いてぞ乗ったりける。鎧踏んばり立ちあがり、大音声をあげて名乗りけるは……

（巻第九「木曾最期」）

というふうにある。

それに対して、ここで紹介する『今昔物語』の武士は、武士がそのように華々しく華やかなものになる以前の、まだはなはだ地味な存在でしかなかったころの姿である。くだくだしい説明をする前に、まず訳文を書きつけてみよう。

左衛門の尉平の致経、明尊僧正を護衛すること

(『今昔物語』 卷第二十三、第十四)

今となつてはもう昔の話、宇治平等院鳳凰堂を建立して宇治殿と呼ばれた藤原の頼通卿が、ただ世に時めいておいでのころ、三井寺の明尊僧正、護持僧として清涼殿の、観音像を安置した一間に詰めているのに、殿は御燈油に火を入れるともいられない。

するとやがて、なにごとのために差し遣わされるのかは誰も知らぬ、にわかはこの僧正を遣わして、夜のうちに帰ってこねばならぬ御用があるというので、お厩では、もの驚きも逸りもせぬおとなしい馬によい鞍置いておいて、ひかえておると、

「この使者護衛して行くにふさわしい者、誰かおるか」

と尋ねられたのへ、その時は左衛門の尉平の致経が伺候していたので、「致経がおります」と申しあげると、殿は「それはよかった」とおっしゃった。

そのころこの僧正は、まだ僧都の位であったので、

「この僧都、今夜三井寺に行つて、今夜のうちにここへ帰つてくるよう、確かに供をいたせ」と仰せになり、致経その旨をうけたまわる。

致経なる者は、かねがね宿直所に弓と矢筒を立て、藁沓というものを一足薄縁の下に隠し、身分低い下人をただ一人ひかえさせておつたのを、人々は、なにやら貧乏くさいが用心のいいやつよと思つておつた。

致経、命をうけたまわるやただちに袴のくくりを高くあげ、暗い中を手探りで、かねて置いておいたものゆえ藁沓をすぐ取り出してはき矢筒を引つ背負うと、おん馬を引き出してくるところにちゃんと立つたので出て来た僧都、

「そこな者は誰か」

と聞くのへ、

「致経」

と答える。

「三井寺まで行こうというに、なんで歩いて行くような姿で立つておる？ 馬はないのか？」と僧都が問うに、

「歩いてまいるとも決しておくれはいたしません。さあすぐお出かけを」

というので、僧都そうず、まことにいぶかしいことよと思ひながら、松明たいまつを先に持たせて、七、八町ほど行くところへ、黒々とした影が二人、弓矢を帯びて向こうからやってくる。僧都そうずこれを見て恐ろしく思っていると、その者は致経むねつねを見るや膝ひざを突いて、

「おん馬、これに」

といつて引き出してみせた馬は、夜だから毛色も見えぬが、はくべき沓くつを持って来ているのを、致経むねつね藁沓わらぐつの上にはいて馬にまたがる。

矢筒やづつを背負うて馬に乗るもの三人引き連れたことになったゆえ、僧都そうずも頼たのもしく覚えつつ行くうちに、さらに二町ほど行くと、傍わきからさつき同様黒々とした人影ひとかげ、弓矢を帯びた二人の者が現われて膝ひざを突く。今度は致経むねつね、なにもいわぬに二人は馬引き出して乗ってひたと従う。これも家来であつたか、おかしげなことよ、と、僧都そうず思っているうちに、また二町ほど行くとまたまったく同じように二人現われて来てひたと従う。この間致経むねつね、なに一つ口を開かず。従う家来たちまた無言。一、二町ほど行くと二人ずつひたと従うので、賀茂かの河原かはらを開放はなれた時は三十余人となつておつた。僧都そうず、打ち見つつ、不思議のことをする者かなと思ひながら、三井寺みいでらに行き着いた。